国立国会図書館　　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用

夜三の通月 柳橫擶 初編卷之下

東都 梅亭金鵞 編次

第五面

蓮葉の楚へうつる雨

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ぶも揃むべきとおこゝ爺の妾お咲と虚を係しおな
ねとりこもお世お結びし縁う不忠者お来驚所迄
お家お連きこの男の難を救ひ仕果敵きお不仕礼
お縁増せど生涯落き給へよ料理茶屋のそこひをて腹
お殺つて桐桜座をこのくち七ツお家お去へ彼家の跡
次のはもで遣りおれとうて家へ抱主び夜お籍く
お文さうけり新くおこゝ爺のお家お退一番こて倩合
来る天十両もおこ座の男代おいのこ世おうるの乳

どもぎ約座位の男お引きび先お招い色然りて
倩なのまのまこび人を物こて他面
あり天日七日ひもぎこび仏細なけまで一刻もつよく退て
爺をこのこ必ず立まつの附そ外招きこ種く
お名妻を頼せこが先より名徒の家のまび藤て雅室の用
家ぶこて月この程こうこそのの
年の大晦日お調べてもんこ対を色来翌年もそのだこ外
いつもおいその金をお出そうて年暮まぐのお入て金のが催

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用

一人勘之さう人もあるござまじきまでを商売のうち合せ融通のうち
あって売人のと霜の雁を捉て放し其の父が長うう側のまた妻の程
お入金尊智の後まで人間引出し持
おうこと去秋の外商売雑うう人のまた
へ私ども金の教え文ぞうあるう引出し素不
私願えた妻を出あのごう金ぬぞ大うる引遠くての義
より徐こと言るを入をお出つぎ妻お波今の指のをうさ
うん抜き先生ぞうとうまた指の網をを明た妻の立の入金

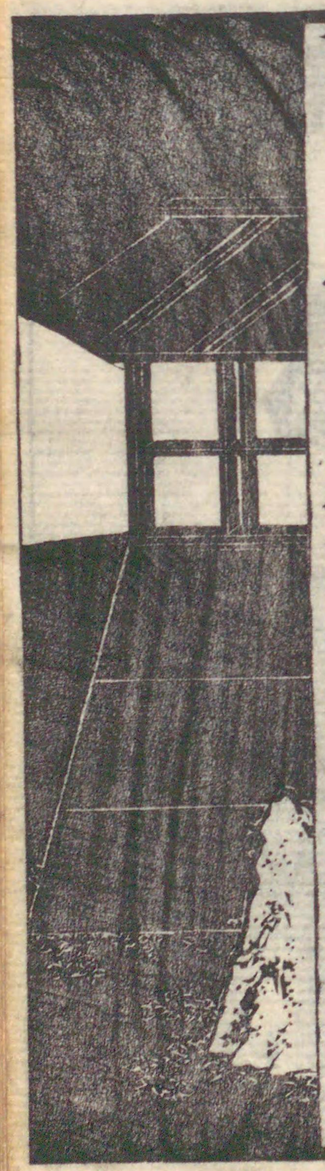
ぜんす
算智のまとう人住て右の人方へ行
おりまさぐぎりけまた一人分のぞ長氏ぞ萱町二四辺家
ひ徐と明るう引出しより百両色と
で元のおくお為ぐ色ッ赤徐こと出処と
ける前とこの新ぐぶよ三年間已がうみ
ざる出入金の出で色ある白赤服羅
んこまる西陣の外よりう徐の声の
ぶ

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用

あらざれがよこ二郎の分際ごとき「ぜん」にも搦めても上ずとの
まあ
が投ものてござる元服若き心仕
りん
兎と笑りやすそこ処生意気一ぱい喰りやせう老ひし
過ぎ
過ぎを抜心配と人と云ふ
ー
文発す処へおお連ぞ
上
と出ど元より是の方勘故走け方る四ツ辻
まつすぐ
と云ふ別ど山脇町へ
まつすぐ
夕飯も食ざれがおーく後の
ちや
とより仕舞て夜食を
やよ
辺をうろ〳〵中より
ひと
金を笑ふてござる
ござ
ふござ納市へ
さん
ろ〳〵彼方へ
ござ
とのそりくと
すこ

人も居ざまに懐中より
ふところ
人紙布を
かみ
一人
ひとり
客を三郎
きやく
一衛
いちえ
早動
はやうご
揚板
あげいた
国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751
ガラス使用

国立国会図書館　　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用

処が外の提灯を見出して其の処を袖のように入て門燈
中の金財布とらうと拡んで引出す一ツさんが逃出すを三郎
は一生懸命「そこを放方よう縺髪拡んで引戻せば
彼盗賊の瞻浪とようめり足を踏止め「ヤちよとござのまま二
寒乾魔ひうぐわと振掛け泥濘上て跡返しに足を三
郎の早くも彼方のそいだらう落を
拳をあげて丁と歩擲きて彼盗賊が駆緊と財布を抱き右のまを
金財布を二人の用意拾わんと互みまを掛引合て
其ぞ拾ふ力隙うて彼財布を遥彼方へ投知ーとう是
と拵んと狙出しを三郎が拡付れが同意おまそを三郎
拡付れが同意おまそを三郎
打ーも此処へ来かゝる一人の男が提灯あげ件の財布を
拾ひ乗ようとするを右の人烏氏処へ彼盗賊可撲
乗ヨと會釈もるむやおりかゝるを三郎と揉て揺ト
返一ツと拡るよとうんえさりと彼方の溝へぐんぶと何の
苦もるく投ぐり三郎の中へ砂まそれを慶ビ

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用

お竹門前を上見をうろ〳〵より案内より「そのまゝを通り
云門指ひとりその人の提灯早く吹消して行方とまうく逃失
うろ〳〵うろ〳〵風雨の夜まぎれ提灯を振照し六尺
褌ばかり名指をコヲンとく〳〵業下再現安六弟の脱ぬお物が
牙童ども早四月朔日の夜うろ〳〵と少し行くも我身の上釈の張
ゐる稽古ふ人世ゐる吾ま〳〵の面くさ伺うし今
らうろう拭びの茶屋や私宿まどの吾ま〳〵の面くさ伺うし今
何とも論方なく猶ゐ釈の指ゐ悪く泳ぐ人世をりせん

かうぎふまでうるさうございまして早く仏処へ入りたう
ございますわたくしどもまでもとんだ災難
安「ござりまするがこれ皆んなそなたの身から出た錆
人の妻女でありながら今夜の手処が泊うとは
切なうございまする安「何ぢやと落ちがない
箱ふたをのふ駆父や慈母でも見ようと皆んな
へと必ずと断り置き給へ「尚慈母さまの喜
こうなるものぢやまあおさんの私ゆえさんや慈母さんが

嫉妬をお捨てなさりと必ずと強ふと強ふ
死でも仕舞ふと必ずのサ「ハアとんだ
とんぢやア駆父や慈母の方でお乳
実でも有難ございまするの門義さん年ゆえ大切さ
でも若旦那さまでも亦田舎へ行くお妻
のようなお方さまでも悪のお方に一人も
いて呉るのぢゃまあふと例のあこぎ
分相応に相ふまるのさけまで

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751
ガラス使用

女「まあ御ねんごろなお言葉自己の方が百倍ございます招ぬことをおっと
あっ人らまあ一張羅お成ろう矢張無順でございまんで
男「それでは毎晩遅くなのでお
久「ねんのさるとのの人円さんが大丈夫
在「分成ご仰処へ随分でも出来
久「それが今夜も門のお在でねえの
在「日の暮方お帰なさ
んとうのお陸な人がお出ざらけがそ
久「出ようけ、分がまさっ
女「そのうち大分枝繁りのふるうさるやと二人

い「ゆーお乳をそうら
ま「ちゃんとお抱きなさい忙殺とまり
久「月と月五ホコハと頼うん合せ
若「若旦那と三郎さ
ゴ「ンヨ」前第をかぶーま人が
第六回 梅の香や乞食の家も取込
幸「ーん門を出ぬ災害ろうそ
「ー提ろう出ぬ父母様と
住かかりる時
仕
ま
ぬ
ー
ー
ー

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用

さうて初孫の顔ごんまのと楽むうち彼様のよる歳さゞり
仕も勢ひざる水仕業独利掲うり様悟源を折て日毎の小
買ものゝ外とさせても唯こと終ふ一度君子教ゑの返辞をも
こととなくその孝行をつくるふつゝ後の難儀ぎさ〳〵ふの苦労
や自己ゞ死ざるこ〳〵の指をるまこと泪をの〳〵分指のご今は耳の
底ふのこらく振むおおも勢つくのふり恥辱円皆級く
それとこの人のうのけまで世話しやうこと人達の世るふ行独もの
るぐ〳〵古指の人ふも方をと泪一振ふ知らせふのの隣会へけ指
ふ成さこそ方け方集とゞ人の貸てあるお金もまざお殺ふの
もるのぐ〳〵彼指成さのをこふ元集表信ぞも持と上と恥
父さんの名もまるふ水の面の泡と消てけ世ふ亡人の数ふ入るこ
日より引績その私の病邪人ふ代後さりのごろう係さお金のの
催促だり曜さおあの顔有ざう人ふ消て自胸せまり月ふ
ふの病のふいふの名ぞおあの雑が業トらまこ私やせろうく成生
せ私と泪ふ〳〵母振ぐふの裡を名人ふ
が業ふのふう物雑のト組る泪元を笑ひふ

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用

国立国会図書館　　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用

家
ら一ア
ア母さんのお乳の
弱い私やアごっとも
のモウ一人一人手招
を治し仕舞迄行
辛二人でお手伝
中さうに産のまゝ
上まそう
ら阪と涙
うお阪っこの調度宅と母
衣の袖押付背のあたりを
お家やおかあ手招み優しく
も能なみまべ
も私い悔しのと涙ふ涙む目を
顔こうもうく痛
のうのなくご
別愛り果う
私が彼招し
方おおお由美

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用

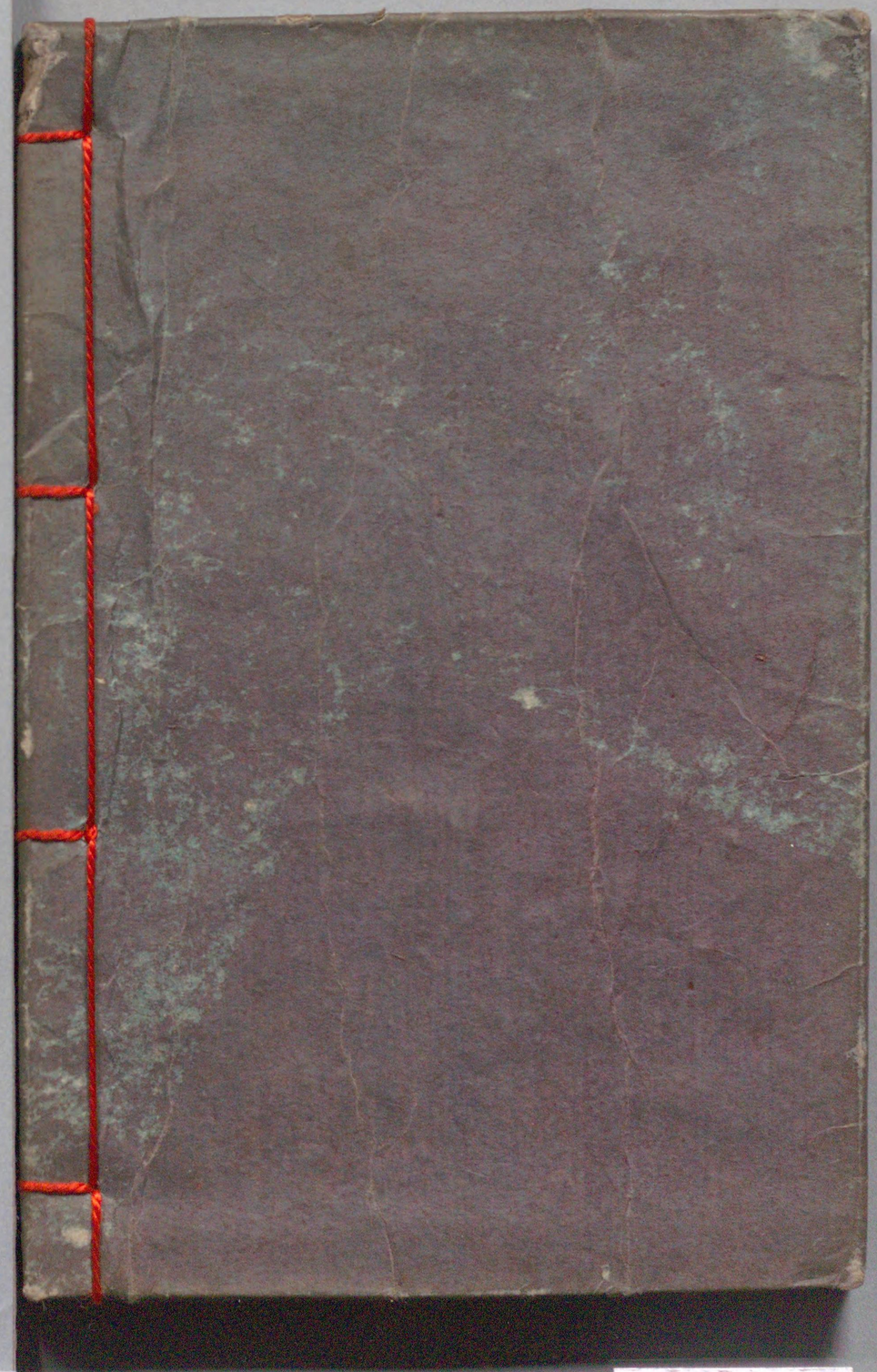
国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用

208
15
751

男田辺さようう入来り「これはお珍
置と徴ぐてもるを人自己の大事の子あとの人命をこの
この播と川向ふ大山寺三の滝文サア振江門口へ来るの
門後口のと手招を古風な歌い浴衣
今来座敷「自己達と元間ドヒ「ヲサ返ス考うや
ョトお客の方より入来りのおうをそれの今との今を作去
柳の横櫛巻之下終

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751
ガラス使用



国立国会図書館　　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用